

『他』 とのかかわりを通して意見・考えを深めるコミュニティの創造 — A Member of the World グローバル社会での在り方を考える (第3学年) —

福井大学教育地域科学部附属中学校 遠 藤 光 彦

国家間のコミュニケーションのほとんどが英語で行われている現代。英語なくしてはODAやフォスター・プログラムなどの国際支援プログラムは成立しない。また、英語を使うことによって自分たちの世界・世界観を広げることができる。本単元の学習を通して子どもたちが国際理解や国際協調について考え国際社会に生きる日本人としての自覚を高め、今後どのような取り組みができるかを考えた。また、子どもたちが国と国とが英語で結びついていることを改めて認識して英語を学ぶ重要性を感じ取り、今後目的を持って英語学習に取り組んでいくことを期待していた。

※子どもの英文をそのまま掲載しているため、文法上の誤りを含んだ英文が多数ある。英文はJTEとALTの添削を終えた後に返却している。なお、下線部は子どもと教師が使った本単元の新出言語材料を示している。また、本実践に出てくる生徒の名前は全て仮名である。

キーワード：国際理解・国際協調、必然性、価値、見通し

1 学びの構想

英語から国際理解、国際協調へ

学習指導要領にあるように、英語科の教材は「広い視野から国際理解を深め、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと」(文部科学省, 2008) が求められている。日本がネパールに対して近年実施しているODA(政府開発援助)の中に、貧困農民支援や食糧援助、道路建設や万人のための教育「Education for All 2004-2009」などがある。この事実や地球存続のために世界が一つになることを余儀なくされている現状を考えれば、未来を担う中学生に対してネパールやその他の発展途上国の生活について考えさせることは、大変有意義であると言える。よって、本単元の指導において、現在完了形や「to不定詞」の定着といった言語学習と共に、国際協調の精神を養うことを第一に考えることは自然なことである。子どもたちが「世界の中の日本」「日本の中の自分」を意識し、国際社会に生きる日本人としての自覚を高めることを期待していた。

世界をより身近なものに

子どもたちを「世界のために何かしよう」という気持ちにさせるにはどうしたらよいだろうか。私はまず、世界が子どもたちにとって遠いものではなく近くのものと感じる必要があると考えた。また、その一方で常に日本での生活と比べ、自分たちの私生活を振り返る場が必要である。そこで、子どもたちは世界の状況を写した写真を見て思うことを述べ合い、その後日本の写真を見てどう思うか考えさせることにした。

子どもたちから出る多様な意見を使って、新出言語材料の定着を図る

学習指導要領に「文法についてはコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」「活用することを通して定着を図るようにすること」(文部科学省, 2008) とある。現在完了形についてはネパールやバングラディシュの子どもたちがしていることを今までにしたことがあるかを尋ねたり、to不定詞についてはネパールの人が望んでいるものを尋ね、何のためになぜほしいのかも答えさせたりしながら定着を図ろうとしていた。協働で考えることで、多様な意見が生まれ、それが新出言語材料定着への良い例文となる。また、一つの意見について全員で考えることで内容に深まりも出てくる。子どもたちの意見・考えを最大限活かした文法指導を考えていた。

2 学びのストーリー

(1) 写真が物語る世界の生活(第1時)

これ、どこの国!?

子どもたちは世界のいくつかの国の写真を見た。しかし、その写真がどこの国の写真かは全く知らされていない。子どもたちが写真を見て気づいたことではなく、国名を聞いてその予想で答えるのではないかという懸念があったからである。子どもたちがまず初めに見たのが次ページの写真である。

子どもたちは写真を見て分かったことを自分のワークシートに英語で書き込んでいった。しかし、英語を苦手としている明希のワークシートには何も書かれていなかった。一方、明希と同じグループの昌孝や他のグルー

プの由衣は次のように書いていた。

There is sad war and peace because a few people have guns and the other people look like little fun.

(昌孝)

I think it is a slam. Poor people live there. (由衣)



子どもたちが見た1枚目の写真

昌孝や由衣は英語はもちろん、どの教科においても課題をあまり時間をかけずに終わらせることができる。特に由衣は考える視点もよく、鋭い意見を言うことも多いため、周りの子どもたちも由衣には一目置いていた。しかし、これが逆に英語を苦手としている明希や他のクラスメイトにプレッシャーを与えているのかもしれない。明希の表情や何も書かれていないワークシートからは、そのような様子が感じ取れた。

教師：What can you tell from this picture①?

昌孝：I think there is a war in this country.

生徒：There are three soldiers.

生徒：Many things are broken.

教師：There is a sign on this truck. What is U.N.? U.N. means United Nation : Kokuren. U.N. protect them from the war.

明希は自分では何も英語で書けなかったため、黒板を見ながらクラスメイトの意見をワークシートに書き写していた。

次に子どもたちは戦争とは正反対のお金持ちに見える国の写真を見た。明希は1枚目の写真の時に2年生の時に習った「there is (are) ~」を使って英語にすることができることを学び、明希のワークシートには次のように記されていた。

There are many chairs. (明希)

明希が記したように、実際にリビングには24人分もの椅子がある。明希はそのことに驚いたのであろう。

子どもたちは次に教科書で取り扱っている国ネパールの隣の国の写真を見た。



子どもたちが見た3枚目の写真

今回はグループで話し合った後に、各班の意見を板書していった。明希はグループメンバーと話し合いながら、次のようにワークシートに記入した。

I think they are in a mountain. There are many cows. (明希)

明希は自信を取り戻したのか、少しずつ意見を言うようになってきた。明希の表情が和らいできているのが見て取れた。

明希や昌孝がいる1班と由衣のいる3班は、班の意見として次のように板書した。

① I think they spend a good and funny life.

③ We think they are farmers because they have a lot of farms.

教師：Group 1, they don't have money, but they spend a good and funny life. Why?

昌孝：Because they don't want money.

教師が板書した意見に対して1班になぜお金がないのに楽しい生活を送っているのか尋ねたところ、昌孝はお金をほしいと思ってないからと答えた。お金を必要としない生活があることを、子どもたちは写真から感じ取ったのであろう。

また、由衣は授業後の振り返りシートの中で感心した英文として4班のThere are a mysterious book and the Buddha. を挙げている。由衣のいる3班には出てこなかった視点だったからである。他者の意見によって自分が気づけなかったことに気づくことがよくある。だからこそ、他者の意見を聞くことは楽しいのではないだろうか。

日本にはゴミがいっぱい

子どもたちは最後に次の写真を見た。子どもたちはすぐに日本の写真とわかったようであった。

There are many trashes. (明希)

Japanese have too much things. (由衣)



子どもたちが見た4枚目の写真

明希も由衣も、日本には無駄なものがたくさんあると感じている。世界の状況から見て日本がいかに贅沢しているか。2人とも自分たちの生活について振り返らざるを得なかったのであろう。

明希は英語を苦手としていて、当初自信がなさそうな表情を浮かべていたが、どのように英語で書けば良いのかがわかったり、グループメンバーと話ができる心地よさを感じたりしながら、後半には明るい表情を見せるようになった。その明希の心境が振り返りシートにも記されていた。

1枚の写真からいろいろなものを見つけだしたり、いろいろなことを考えたりするのはおもったよりもむずかしかったです。でもその写真からたくさん想像することができたので楽しかったです。(明希)

授業の終わりに子どもたちは教師から本単元の課題を伝えられた。それはWhat can we do for the world? である。現段階での自分の意見を書いてくることが、次の授業までの宿題となった。

(2) 世界のために何ができる？ (第2時)

まず前時の宿題になっていたWhat can we do for the world? に対する答えをペアで発表し合った。明希と由衣は次のような意見を残している。

We can help many people. And we must love the earth. We can send much money to poor people. We can clean our city. (明希)

Japanese have too much things and they dump a lot of things. But people of some countries are poor. We should help them. For example, collecting caps, giving money to Unisef, and so on. Doing them are easy.

(由衣)

2人ともに共通している内容は、日本は貧しい国に対して物やお金をあげるといった物質的支援をするべきだという意見である。全体の意見を見ても、raise fundやgive our clothesなどが多く、「支援＝物質的支援」と考

えている子どもが多いように感じた。

(3) 驚くべきネパールの生活事情 (第3時)

子どもたちにネパールについて知っていることを尋ねたところ、中国の近くということぐらいしか返ってこなかった。そこで、教科書を使いながら簡単にネパールの地理的特徴を確認してから、「レヌカの学び」という教材を使って、ネパールの人の行動とその行動理由について考えることになった。

「レヌカの学び」には、レヌカというネパールの女性から見たネパールの習慣と日本の習慣が、日本語でカードに書かれている。子どもたちは教師が英語に書き直したそれぞれのカードを見て、ネパールのことか日本のことをグループで話し合いながら決めていった。

明希のいる1班は5班と一緒に話し合った。下は明希がネパールの習慣か日本の習慣かを決める際に、迷ったり間違ったりしたカードのいくつかである。

ネ：Even if I have a slight cold, I don't go to work.

日：If I have a slight cold, I'll go to work.

(日本もネパールも休んでいるのではないかなと思ったから。)

ネ：I'm sure to have breakfast every day.

日：I sometimes skip breakfast.

(日本人も最近朝ごはんを食べていないと言われているけど、ネパールはどうなのか分からなかったから。)

教師がなぜそれがネパールの習慣なのかを解説すると、子どもたちは静かに耳を傾けた。それは、薬代や診療代が高額なので風邪が悪化しないうちに治したいという理由や、ネパールでは一日二食なので朝ご飯を食べないと夕食までご飯を食べることができなく、場合によっては遅刻することよりも朝食を摂ることが優先され、また認められているという話、レヌカが日本に来てから遅寝遅起きになったのはネパールにはない電気が普及しているからという話などが、子どもたちにとっては「目から鱗」の話だったからではないだろうか。子どもたちはネパールの人の暮らしを少しずつ理解しながらも、日本の豊かさを改めて感じたようであった。

(4) ネパールの子どもの生活事情について考える

(第4時)

教師はNPOシャプラニールさんより、バングラデシュとネパールの子子どもたちが撮った写真のセットと、バングラデシュの首都ダッカで家事使用人として働く少女の暮らしや表情、支援活動の一コマを捉えた写真のセットを借りてきて廊下に掲示した。また、第1時で使った「地球家族」の残りの写真も教室内に掲示した。それは世界各国、特にバングラデシュやネパールに住む子どもたちの生活状況を言葉で伝えることが難しいと思ったからである。



廊下に掲示してある写真を見ている子どもたち

子どもたちは教科書P.22, 23, 24やNPOシャプラニールさんより拝借した写真を参考にしながら、Many people cannot go to school in Nepal. Why not? の答えについてグループで考えた。明希のいる1班からは次のような意見が出てきた。

- ・ Nepal is very poor country.
- ・ Many children must work hard.
- ・ They walk to a well to get water for their family, and the water is heavy and it takes time.
- ・ They have a lot of work to do.

しかし、多くの班でa lot of workの内容が具体的に示されていなかったの、廊下の写真を参考に改めてどんな仕事があるのかを尋ねてみた。

- ・ They work in farm.
- ・ They get shell.
- ・ They push car.
- ・ They break レンガ.

この他にも他の班からはpick up irons やraise vegetables などが出てきた。明希は英語の面では苦手意識があるが、内容面では気づいたことをどんどんグループメンバーに伝えていった。明希の感想からも、明希の自信の様子が伺える。

ネパールの人々が学校に行けないのはなぜか、自分で考えてから班でまとめてクラス発表？しました。たくさんの意見が出ていておもしろかったです。また、自分の意見もたくさん出すことができてよかったです。(明希)

(5) ネパールの子どもたちを尊敬 (第5時)

子どもたちは教科書の写真や廊下の写真を見て、Why are they smiling? の答えを考えた。また、What do you learn from Meena's letter? についても意見を共有した。明希のワークシートには次のように記載されていた。

They enjoy learning something.

Each of them think working is usually.

1班は仕事をするのが当たり前で、それを楽しんでいると答えている。また、由衣のいる3班も同じような意見を出していた。

They are glad to sustain their lifes.
They are enjoying their works.
They think their works are their games.
They feel they are a member of their family.

教師から見て明希と由衣の間に英語力という点では差はあるものの、意見の内容としてはほとんど同じであることがおもしろい。2つの班とも明希と由衣が中心に意見を出している上に、どちらもどことなくネパールの子どもたちをうらやましがる内容となっている。明希は自分の意見がクラスメイト、特に由衣のいる班の意見とあまり変わらないことで自信を得ているのかもしれない。

由衣はミーナの手紙から学んだこととは別に、ネパールの子どもたちへのあこがれととれる思いを英文にしていた。

I want to be patient like them. (由衣)

由衣はもともと我慢強く、自分の仕事は確実にこなす方である。しかし、その由衣でさえもネパールの子どもたちのように忍耐強くなりたいと思っている。

また、由衣は授業後の感想の中で、つぎのようにも書いている。

「仕事=あそび」というのは、おどろくと同時にかなしくなった。日本ではまず考えられない。(由衣)

廊下に掲示された写真の中に、小さな子どもたちがおもしろがって牛糞をかごに入れる仕事をしている写真がある。由衣はこの写真を見たのだろう。由衣の頭の中には、「牛糞をかごに入れる以外の遊びがないのかもしれない」という思いがあったのであろう。写真とその解説文から、その裏事情までもを予測できる由衣はさすがである。上記で述べた由衣の心の強さやこの洞察力の高さが、クラスメイトからの尊敬の念につながっているのかもしれない。

(6) ネパールの人が望んでいるものから、自分たちの生活を振り返る (第6時)

この時間はWhat will they want (need) in their daily lives? Why? について考えた。しかし、教師が急に休まざるを得なかったため、英語委員会を中心に子どもたちだけで授業を進めることになった。

英語委員は教師の普段の進め方を見まねて授業を運営した。教師がいなかったせいか、自分たちでしなければいけないという雰囲気がいづも以上にあり、集中して取

り組めたのではないだろうか。こういう時こそ、子どもたちの本当の力が試される。出てきた意見もよかった。明希や由衣は他の班が考えた次の意見に感心していた。

- ・ We think they need a new technique because they can change their life.
- ・ They will want a bike because they can go anywhere to get food.

技術や自転車というのは自分たちのグループでは出てこなかった意見で、おもしろいと思ったようである。

次に子どもたちはWhat will they want to do at night if they can use electricity? について考えた。子どもたちはネパールやバングラディッシュの子どもたちの生活を思い出しながら、彼らの身になって考えた。明希のいる1班と由衣のいる3班は次のような意見を残している。

They will want to watch TV because it has a lot of information. And they will want to use a refrigerator because it can keep food. (1班)

They will want to study at night because they want to know many things.

They will want to work at night because they want to make their life rich. (3班)

教師としては、4班から出てきたThey will want to go out because their town will be bright at night. という意見が聞けてうれしかった。なぜなら、次の時間に外出することが危険であるという話をしようと思っていたのと、ほとんどの子どもが家の中について言及しているのに対し、この4班だけは家の外がイメージできていたからである。

明希はネパールやバングラディッシュの人について考えながら、自分たちの生活について振り返っている。それは、彼らがほしいものをほとんど全て自分たちは手にしているからである。

彼らが生活をしていく中で何が必要かと、電気があったら何をするかを考えました。必要なものは意外とたくさんあるのだなと驚いたし、今いかに自分がぜいたくな生活をしているのが改めて分かりました。(明希)

教師の方から子どもたち自身の生活について振り返るように言わずして、明希が自分の生活について考えてくれたことはうれしかった。明希の中で「じゃ、自分はどいうなの」ということを考え始めた証拠であろう。

(7) ネパールの人が本当に望んでいるもの (第7時)

この時間の最初に、子どもたちは第5時と第6時のグループ毎の意見を読み返し、改めて感心した意見を選んだ。明希は2つの意見に感心したようである。

I am impressed with No.22 idea (They will want some

bikes because when they carry heavy things with bikes, it doesn't take much time.) because I think they have a lot of work every day.

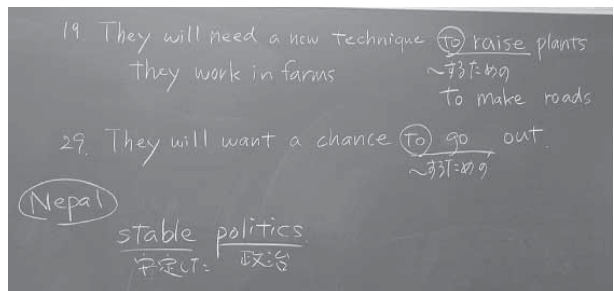
I am impressed with No. 30 idea (They will want to study because they have a lot of work to do in the morning and evening.) because I think they want to study very much. (明希)

明希はネパールの人がたくさんの仕事を抱えていることを心配しているのか、仕事が楽になるものや、仕事のためにできていない勉強について言及している。全体の場でも、昌孝がNo. 22の意見に感心しており、他の生徒も「日中に勉強ができないから夜に勉強したいだろう」という意見に感心している。

次に教師は5班の2つの意見They will need a new technique to change their lives. / They are glad to have a chance to study. を使って、ネパールの人が本当に必要としている技術は何か、何をする機会をほしがっているのかを考え、下線部のto不定詞のところに自分たちの予想を書くように伝えた。明希のいる1班は具体的なアイデアは何も浮かばなかったようである。クラス全体に尋ねたところ、由衣が次のように答えた。

由衣: They will need a new technique to raise plants because they work in farms.

教師: Oh, you have a good idea. Actually I asked a woman who has been to Nepal. They want roads, so we can say they will need a new technique to make roads. And also Nepalese people want stable politics because they have a lot of strikes and they cannot go out. So Nepalese people want a chance to go out.



この時間の板書の様子

明希は自分の意見を出すことができなかったものの、授業後の感想には「私は井戸をつくるための技術が必要だと思いました」という意見を残している。由衣や教師の話を聞きながら、自分なりの意見を持つことが習慣化されてきたようである。

(8) 身近にいた国際人ションコルさん (第8時)

この時間には、福井大学工学部の研究生であるバングラディッシュ出身のションコルさんをゲストティーチャーとしてお招きした。まず初めにションコルさんに自己紹介をしてもらったが、独特の英語で子どもたちにとって

は聞き取りづらい英語だった。由衣の感想の中にも「英語をここまで難しく思ったのは初めてです。」と書いてあった。そのため、教師が少しずつ噛み砕きながら自己紹介をしてもらった。ションコルさんは癌を治すための薬をキノコから開発しようとしている。その研究のために福井大学の先生のもとで現在研究を進めているらしい。

ションコルさんを前にして、子どもたちはWhat should we Japanese do for the world? に対する答えをグループで考えた。明希のいる1班は次の意見を出した。

We had a lot of technique, so we should teach it. We should hope love and peace.



各班の意見に対してコメントをするションコルさん

ションコルさんは1班の意見に対して、clothes techniquesとagricultural techniques,そしてmedical techniquesが必要だとコメントして下さった。また、バングラディシュでは1人の医者に対して5,000人の患者がいることが問題となっていることも教えて下さった。この他にも、外国へボランティアをしているように見せかけて利益を得ている会社があることや、その国の実状を知らずに外国が間違った支援をしていることがあるというお話もして下さい。また、教師からも青年海外協力隊としてネパールへ行った岩崎さんから聞いた話をした。それは日本人としてまず外国の社会背景を知ること、そして自分たちにできることについて考えること、最後に行動に移すことである。

授業の最後に何かションコルさんに質問がないか尋ねたところ、由衣が質問した。

由衣：Why did you come to Japan?

ションコル：I came here to do reserch. In Bangadesh, many people are dying because of cancer. I want to do something for cancer. In Fukui University, there is a professor who is working for cancer. I contacted with him. That's why I came here.

教師：What are you going to do after you go back to Bangladesh?

ションコル：I'm a teacher of Bangladesh Agricultural University. I want to make very cheap medicine

for cancer. From mashroom or something. To go to a hospital or to have an ope, people need a lot of money, so I want to make cheap medicine.

ションコルさんはバングラディシュのために癌を治す薬の研究をしている。明希はそのションコルさんの熱意に感動していた。

この時間は外国の人とおはなしができて楽しかったです。由衣がなぜ日本に来たのかを聞いた時に、国のためを思っていることを知って感動しました。(明希)

由衣は明希にとってあこがれの存在かもしれない。どの授業においても由衣の発言にはみんなが耳を傾ける。また、由衣もみんなが見てくれている、聞いてくれていることをうれしく思っているように見える。教師から見ていて、このような関係は微笑ましい限りである。

(9) 今度は私たちが国際協力を！(第9時)

最後に英語でレポートを書いた。その内容は授業中に学んだことや考えさせられたこと、そして世界の一員として自分ができること、したいことであった。次は明希のレポートである。

I could learn the poor people all over the world. For example, children in Nepal have a lot of work. Because they have not much money. So they can't go to school. But they want to study. I hope they can study hard. I think we must support them to catch happy life.

Nepal is poorer than Japan. Because people in Nepal sure to have breakfast every day. I think Japan is rich.

Mr. Shonkor came to Japan to do reserch. In Bangladesh, many people are dying because of cancer. He wants to do something for cancer. In Fukui University, there is a professor who is working for cancer. He contacted with him. He going to do after you go back to Bangladesh, he is a teacher of Bangladesh Agricultural University. He wants to make very cheap madicine for cancer. From mashroom or something. To go to a hospital or to have an ope, people need a lot of money, so Mr. Shonkor wants to make cheap medicine. I think Mr. Shonkor is very good person.

I think in the world isn't as rich life as Japan.

I think we should hope for love and peace. We have a lot of techniques. So we should teach them. (明希)

明希は英語を苦手としているためか、授業記録や自分のワークシートに書いた英文を多用してはいるが、自分の言いたいことを言葉を借りながらしっかり伝えている。逆に、由衣は全て自分の言葉で書き表している。

We learned about the world from this class. We were showed many pictures of some countries. For example, Nepal, Bangladesh, India, and so on. Some of them are pictures of working children. "The children are working with smiles. Why?" Mr. Endo asked us. I thought that the children are glad to sustain their lives. Although it is right, there is another reason. They think their work is like a game. This thing made me surprised and I was remembered "Renuka no manabi." Children in Nepal don't play with toys because there are no toys.

By the way we spoke a overseas researcher from Bangladesh. His name is Shonkor. He said us "To know about countries is important because foreign people sometimes wrong helping."

I think we are happy. We can do anything, so we can do something for the world. We should study, learn and know about the world. We can do them and must do them. If we'll try, maybe something change around us. (由衣)

不思議なことに、明希の文章の中にも由衣の文章の中にも、第1時の終わりに書いた物質的支援のことは全く書かれていない。書かれているのは、技術を教えること(明希)と世界について勉強して知ること(由衣)であった。明希も由衣も、日本人としてまずしなければいけないことが何なのかを考えたからこそ、技術や知識が答えとして挙がってきたのではないだろうか。

3 省察

(1)「かかわり」「価値」から「見通し」へ 国際協調の精神を高める必然性

世界の諸外国に対して少しでも貢献できるよう、子どもたちが自分にもできる小さなことから国際協力に取り組んでいこうという気持ちになることも願っている。そのためには、世界を身近に感じさせる環境作り、場の設定が必要である。

「地球家族」やNPOシャプラニールさんから拝借した写真は当然であるが、何よりバングラディシュからの留学生ジョンコルさんが教室に来て話してくれた内容がとても良かった。ジョンコルさん自身が、子どもたちが目指すべき国際人である。そんなすばらしい人を目の前に話が聞けたことで、支援の仕方が「物質的支援」から「技術」や「知識」へと変わっていったのではないだろうか。

英語を学ぶ意義

上記にあるように、子どもたちは国際協調のためには「技術」を伝えたり、世界について「知識」を深めたりすることが必要だと認識し始めた。しかし、その「技術」を伝えたり「知識」を深めたりするためには一体何が必要かまでは、まだ考えていないようである。そこで教師が単元が終了してから改めて「自分たちがしようとして

いる国際協力するためには、一体何が必要なのか」と子どもたちに尋ねることが必要である。

英語が使えるとどういう良いことがあるのかという「価値」に気づいた時、つまり、英語が自分の生活の中で必要になってくるという「見通し」が立った時、子どもたちは自分から本腰を入れて英語の勉強を始めるであろう。教師は子どもたちが英語が持つ「価値」に気づき「見通し」が立つような支援を施していく必要があるのではないだろうか。

『他』とのかかわりから自己を高める

他者の情報や意見・考えが、自分が気づけなかったことに気づかせてくれることがよくある。他からの情報により自己を振り返り、自己を高める方法を見つけることができる。自己のより良い生き方を見つけることができる。だからこそ、他者の意見を聞くことは楽しいのではないだろうか。では、本単元の中で、明希や由衣はいつスイッチが入ったか。どこで「見通し」が持てたのだろうか。

明希は英語を苦手としていたため、単元当初はどことなく暗い表情を浮かべていた。しかし、由衣や昌孝の英文を参考にすれば、自分の言いたいことが英語で言えるとわかってから、明希の表情が明るくなっていったような気がする。つまり、明希は自分の言いたいことを言う「術」をクラスメイトの発言から発見したことにより、自信を持って授業に参加することができた。また由衣も、ネパールやバングラディシュの人たちの暮らしを知ったり、ジョンコルさんが日本に来た理由を知ったりしたことで、自分たちがまずしなければならないことを認識し、それを行動に移そうとしている。

(2) 新出言語材料の使用価値が言語獲得へ

本単元における新出言語材料は、現在完了形(経験・完了)とto不定詞の形容詞的用法であった。現在完了形(経験・完了)に関しては、教師が話をするときに使用した程度であった。それは、子どもたちに実生活に関するある課題を与えて現在完了形を使わせることが容易ではなかったからである。

to不定詞に関しては、教科書本文やジョンコルさんの言葉、子どもたちの意見・考えの中で多く用いられていた。それはto不定詞が使いやすいという特性にあったのかもしれない。to不定詞の中でも、副詞的用法と形容詞的用法は情報を付け加える時に有効である。子どもたちは自分の意見・考えを述べるときに、to不定詞が使えることに気づいた、つまり、to不定詞の「使用価値」に気づいたからこそ多用したのではないだろうか。また、自分たちが使うだけでなく、友達の発言やレポートの中にもto不定詞が使われているため、聞いたり読んだりしながらto不定詞を獲得していくことができる。教師は子どもたちにその新出言語材料の「使用価値」を認識

させることができれば、子どもたちは自分からその言語材料を使い獲得していくのではないだろうか。

参考文献

マテリアルワールド・プロジェクト（1994）『地球家族
～世界30か国のふつうの暮らし～』TOTO出版
特定非営利活動法人シャプラニール市民による海外協力の会の写真『子どもの瞳に映る世界セット』『家事
使用人として働く少女セット』
土橋泰子（2004）『レヌカの学び～自分の中の異文化に出会う～』あおもり開発教育研究会／開発教育を考える会

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 外国語編』
福井大学教育地域科学部附属中学校（2008）「学びを拓く《探究するコミュニティ》」『研究紀要』第36号
福井大学教育地域科学部附属中学校（2009）「学びを拓く《探究するコミュニティ》」『研究紀要』第37号
福井大学教育地域科学部附属中学校（2009）「学びを拓く《探究するコミュニティ》」『研究紀要』第38号
福井大学教育地域科学部附属中学校研究会（2009）『授業のプロセスとデザイン』第2巻
大下邦幸（2009）『コミュニケーションクラスのすすめ』東京書籍
大下邦幸（2009）『意見・考え重視の英語授業』高陵社

Creation of a Community in Which Students Deepen Their Own Ideas and Opinions Through the Relation with "Others"
"A Member of the World" Thinking of What We Should Be in Global Society

Mitsuhiko ENDO

Key words : international understanding, international cooperation, necessity, value, perspective